

週報

2006年 11月 19日



主の業に励もう コリント15:58

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

教会学校	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル商会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885

静岡県清水区草薙杉道3丁目2-26

☎0543-45-4070 E-Mail grace@big.jp

牧師 村上定幸

《今朝の聖書から》聖書箇所は『ルカによる福音書』20:27~40です。新共同訳聖書には、小見出しが付いていて「復活についての問答」となっているところです。この箇所の前には「葡萄園の農夫の喩え」があり、今日の箇所の次には「終末のしるし」が続いています。イエス様は、論争を通して“神の国を指し示す働き”をなさっているのです。また今日の箇所と同じ記録が、マタイ22:23~33、マルコ12:18~27にも出てきます。どの福音書においても大切にされている問題であることが判ります。今朝の聖書を読み進めましょう。27節で「復活ということはない」とサドカイ派の人は主張していたとあります。しかしイエス様の教えの基本の基本は、神の国でした。サドカイ派の人々はモーゼの律法の書をよりどころにしていました。確かに、律法の書には“兄弟が一緒に住んでいて、そのうちのひとりが死んで子のない時は、その死んだ者の妻は出て、他人にとついでにはならない。その夫の兄弟が彼女の所にはいり、めとって妻とし、夫の兄弟としての道を彼女につくさなければならぬ。(申命記25:5)”とあります。人は死んでその民に加えられることははっきり示していますが、やがての復活については触れていません。これは新約聖書全体の教えと異なります。20:33節までつづく、質問のための質問を通して、イエス様が告げられた“神の国がやってくる”ということの矛盾を突こうとしたのです。私たちは“一体神の国は私にとってどんなところだろう”と思い巡らしますし、希望にもしています。イエス様はこの箇所でも、私たちに神の国について説明してくださっているのです。35-36節が、その答えになっています。それどころかモーゼも、神様は“いま生きているあなたの神”ですと、教えてくださいました。旧約聖書で神様は、“アブラハム、イサクの神”というふうにご自身を語られます。“アブラハムの時代の神だった”ではないのです。私たちが神様という時、今もこの神様は“アブラハムの神”なのです。私たちには想像を超える神様の世界が全ての罪からの解放というかたちで、天国に於いて展開されるのです。ダビデも系図の関係を越えてキリストを主と呼びます。